

(5)口をつぐむ被爆者たち

調査団員は被爆者を診断し、標本を採り、被爆者たちに聞き取りを行なった。しかし、被爆者たちは口をつぐんで語ろうとしなかった。

広島で被爆した丸山眞男が被爆後に広島を訪れるのは 1977 (昭和 52) 年のことである。

「被爆以来、行く気しないわけ、どうしても行く気しない。(中略) ほんとに被爆した人間はどうてい行く気しない。それを、やっと勇を鼓して行った」(丸山眞男『自由について 七つの問答』SURE、2005年) と述べる。

重い経験というものは、それについて人が語ることをしばしば拒む。その理由は何だろう。ひとつは、いかなる経験を語るにも過去に意味を付与された言葉によって語らざるを得ない。しかし、重い経験、あるいは前代未聞の経験は、過去に意味を付与されたどんな言葉をもってしても表現しきれない。どう表現しようとも、同時に、そういうことではない、という意識が生じる。

もうひとつは、その重い経験を自分自身が乗り越えないと語るができない。自分なりにその経験について整理し、客観的に見られない限りみずから語ることはできない。そして、重い経験は、自分の経験であって、どう表現したところで、自分以外の人間には伝わらない、という意識が生じる。これらは、いずれも、その人の経験を語ることを躊躇(ちゅうちょ)させる。かくして、語ろうとする者は聴こうとする者に対して、聴こうとする者も語ろうとする者に対して、「超え難い無限の距離」を感じることになる。

加藤は広島で残留放射能を浴びただろうとはいえ、丸山のように直接に被爆したわけでは

なかった。広島で被爆した人を見たのである。しかし、加藤は、はたして自分は広島を見たのだろうか、という疑問を強く感じていた。アラン・レネ監督の映画《*Hiroshima mon amour*》（邦題『24時間の情事』、脚本マルグリット・デュラス、1959年）で、行きずりのフランス人女性と日本人男性とが一夜をともにして「私はヒロシマを見た」「いや、きみはヒロシマを見ていない」と繰り返す会話のように、自問自答を繰り返していたに違いない。

しかし眼のまえの患者と医者との間の沈黙は、破らなければならなかった。言葉であらわせることを言葉であらわし、その意味を見つけ、そうすることで、その人にとっての経験を、私の観察し分類することのできる対象に変えなければならない。

「そのときあなたは何処にいましたか」と私はいった。

「姉の亭主が出征していましたから、姉の家で……」。

「お姉さんの家は、この地図の上でいえば、どの辺に当りますか。……なるほど、爆心から三軒ぐらい……家は木造ですね、その中で、あなたはどちらを向いていましたか」。

そういう質問は、その人にとって、あきらかに、どっちでもよいことにすぎなかったろう。そういう質問を、広島に被害者に浴びせるのは、ほとんど野蛮な行為である、と私は感じていた——家が木造であろうとなかろうと、姉の子供は死に、姉の眼は見えなくなり、その人の人生は変わったのである。いふべからざる経験が一方にあり、当人の人生にとっては何の関係もない事実が他方にある。しかし世界を理解するためには、一個の人生を決定するだろういふべからざる経験ではなくて、言葉に翻訳することのできる事実を言葉に翻訳することが、必要なのである。もし広島が私に教えたことがあるとす

れば、それは、その対照がどれほど激しく、どれほど堪え難いものにまでなり得るかということであつたらう。すなわち私は、黙って東京へ帰るか、留って広島「症例」を観察するか、そのどちらかを選ぶほかはなかった。広島「症例」ではなく、広島の人間を眼のまえにして、私には言うこともなく、また為ることもなく、そもそもそこに長く留る理由もなかった。私は留った。(『続羊の歌』「広島」)

どんなに言葉で表わすことがむつかしかったにせよ、世界を理解するには、あるいは科学者として研究を全うするには、眼の前の正視しがたい事実であろうとも、これを冷徹に観察し、厳密な言葉で科学的に表現しなければならない。広島に即していえば、完全に医学の領域に限定して、医者である加藤が患者である被爆者を「症例」として見ざるを得ない。ところが、人間は科学や医学のために生きているのではない。科学的に、あるいは医学的に分析出来るのは、その人間のうちのほんのわずかな部分に過ぎない。その人間を全体的に理解しようとするれば、とうてい科学や医学だけでは十分ではない。のちのち「科学と文学」といった論考に結実する考えのきっかけのひとつを与えられた。

かくして広島に「長く留る理由もなかった」と加藤は考え、留まって調査を続けるかどうかについて悩んだ。しかも、合同調査に自主的に参加したのではなく、指導官の命令的な誘いで合同調査に参加した加藤に、医業を廃する覚悟をもたない限りは「広島に行かない」選択肢や、ひとり「東京に帰る」選択肢はなかったらう。ゆえに「私は留った」というよりも「留まらざるを得なかった」。「留った」以上は、被爆者を完全に「症例」として観察するしかない。

「留る」ことを決断した加藤は、「観察者」としての自分の無力と孤独を悟った。「高みの見物」を標榜し、観察者であり続け、観察者としての自負をもっていた加藤だが、広島では観察者にさえなれないことを強く意識した。広島での体験は加藤にとって重かった。のちに加藤は医業を廃することになるが、その理由のひとつは、間違いなく「広島体験」にあった。